

心の発見 科学編 1971年 三宝出版

高橋 信次 (たかはし しんじ)

幼少の頃から靈的体験を重ねるとともに、電子工学、物理、天文、医学などを学ぶ。コンピュータ機器の製作作業を営む。

意識の中心は心

心は内面に存在し、肉体舟を支配している意識の中心であり魂の核である。肉体舟に乗ってしまうと、外面向的な諸現象にほんろうされて、肉体の支配者は迷う。心はとらえることがむずかしく、軽率で動搖しやすく、欲望のままに動き、守りがたく押さえがたいものだからである。自己保存に走り、我欲をむさぼりやすい。しかし、心は核の中心に近づくにつれて、神仏の子としての自覚、善惡の判断を持つようになる。これはそして、人間の誰彼なしに持っているものであり、その核は無限大宇宙生命に通じている。核の中心より外側へ行くにしたがって、肉体舟の五官に影響され煩惱に支配されるようになって行く。

意識の想念は、無限大に拡大することも、極小世界にも通じ、その中に存在する善惡の世界にも通じることができる。

見きわめがたい心、欲情のままに動く心、微妙な心、さすらいの心、落ちつかない心、怒りの心、喜びの心、悲しみの心。こうした心を正しい神理にもとづいて、制御することのできる人々は心の安らぎを得て、一切の苦しみから抜け出すことができる。

意識こそ記憶の根本

従来、医学においては、大脳が考えたり、想像したり記憶する場所だといわれている。こうした考え方のすべては、肉体现象をとらえての判断であり、正しくない。脳は、「意識の意志による通信行為の、五体各機能の管理室計算センターのようなもの」と認識すればよい。

意識こそ私達の根本であり自分そのものであって、あの世とこの世を転生する、生死のないものである。

人間の生死とは、肉体舟の乗り換えにすぎず、その肉体が亡びても魂は永久に変化することもなく、増減もしないということである。

自己保存と偽善者

自分自身の欲望を満足させるのみで、他人のこなど考えもしない者は、自己保存である。このような人々は、自分自身の都合の良いことのみを主張し、その地位、名誉、物欲のためには他人を犠牲にしてかえりみない。自分の名前や家柄に傷がつくなどと常に考えている。人から称賛されることに満足して、忠告に対しては感情的になり、報復を考える。経済力で人々から尊敬されようとし、過信し、その心の行為に調和がない。常に自己中心的にものを考え、目先のこととにとらわれて物質経済

がすべてだと、固執する。他人を信じることなく、己は信じさせようと金品を使う。他人に裏切られると恨みを持つが自分は他人を詮索し、裏切りを平然と行う。このような人々は、一時は栄えたかに見えて、慈悲と愛がないため必ず没落してゆく。心に安らぎがなく、いつか近親者からも不信の念を持たれるようになり、最後は孤立してしまう。

足ることを知らない心貧しき者、とはこのような人々をいうのである。その心は餓鬼道に通じ、反省がないため、人生が終ると、地獄で仏性を悟るまで、より苦しい修行をしなくてはならない。

反世界、反物質は立体物質界

現象界(この世)における物質は約百種ほどの元素からできている。これらはすべて原子からできており、この原子も電子、原子核からなる。

これらの最小構成単位はすべて正の物質と反の物質から成り立っている。

電子—反電子、核子—反核子、陽子—反陽子、中性子—反中性子などである。

このように考えると正宇宙と反宇宙、私達の肉体にも反肉体の存在があることは明白である。

私達の肉体に吸収されている光と、細胞より造り出されているもうひとつの反宇宙的身体こそ、光子体というものである。

光子体は私達の肉体と一緒にになっており、良く仏像や光の天使にある後光と同様に、肉体の影のように見える。

この光子体は肉体を去るときに分離される。私達のあの世での生活の乗り船である。非物質的なエネルギーの集中によって構成されている光子体は、潜在意識を包含している無限大な知恵の宝庫である。そこには私達の輪廻転生の一切も記憶装置の中に記録されている。

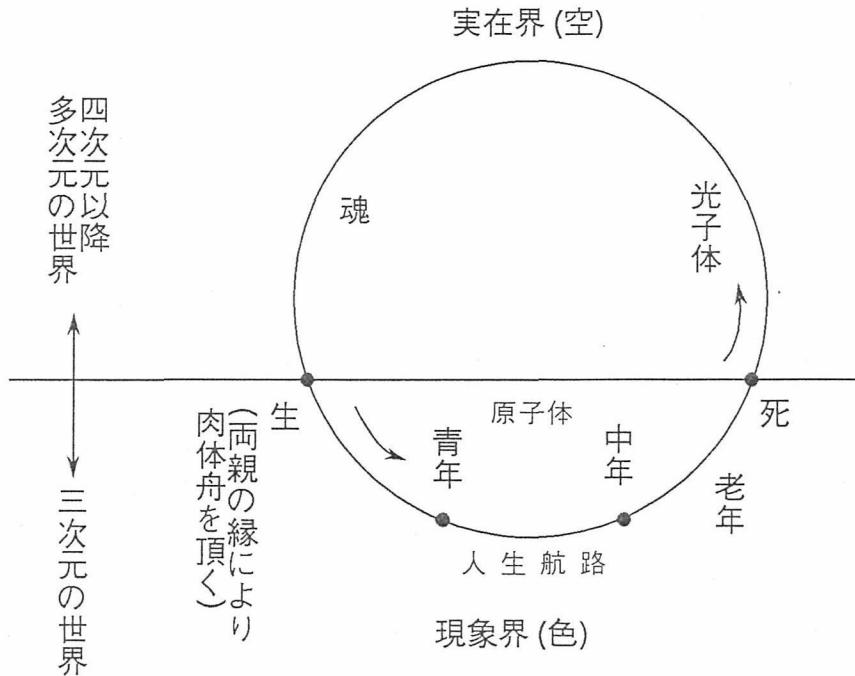
色即是空の原理

私達の意識の世界は、この現象界の次元とは異なった世界にある。この世界は現象界、すなわち三次元の世界であり、意識の世界は、あの世すなわち四次元以降の世界で、実在界、という。

肉体舟に乗った船頭(意識、魂)は、人生航路の魂の修行に船出すると、10%の表面意識となり、90%の意識は潜在して永い転生輪廻の間に学んだ自分の過去世の経験を忘れ、その想念の状態、業の修正、魂の浄化をしてこの世に出てきたにもかかわらず、神仏の子としての自覚を忘れてしまう。悪の想念行為は人間自身がつくり出したものである。

そのため肉体舟の持つ眼耳鼻舌身意の六根に振り回され、煩惱によって造り出した怒りやそしりや妬み恨みなど、中道を忘れた想念行為によって、意識の中心の“心”に曇りを造ってしまい、神仏からの光をさえぎってしまうのだ。

その結果、潜在意識の無限の仏智、英智を開発することができない。肉体的、物質的、経済的な外面にとらわれるために、本来の心を失ってしまうのである。



肉体的現象のみが人生のすべてではない。あの世とこの世との往来は、魂すなわち船頭の原子体の舟と、光子体の舟の乗り換えにしかすぎない。

私達の意識(魂)、船頭は、本来生まれたものでもなく死んだものでもない。そして、それは増減のあるというものでもなのである。

色即是空、空即是色の原理は、物質界、意識界を問わず“色心不二”なのだといえるだろう。それを、この世がすべてだ、と私達は思っているため、肉体の五官に惑わされて心を失っているのではないか。五官は、この世の現象を客観的にとらえた結果を示すのみのもので、それが絶対ということにはならないのだ。

目で見る範囲は、たとえば七色の虹の色彩を確認することでしかない。紫外線以降の世界も、赤外線以降の世界もそれをとらえることはできないのである。

これに反し、心の眼は、その心の調和度によって次元の異なった世界を見通すことができる。

あの世とこの世

現象界この世は、善と悪、調和と不調和の諸現象が同居している社会である。

それは、私達の意識が、人生航路の修行場を渡って行く肉体舟の五官六根という煩惱が造り出した産物である。煩惱が肉体舟を支配してしまうと、表面意識が10%、潜在意識が90%となって、あらゆる事象に対し、自己保存になってものの判断が鈍ってしまう。判断が鈍ってしまうから自己発見のために修行ができるということにもなる。

あの世、実在界は、天上界、地獄界に大別されて、善悪がはっきりと区分されている。なぜなら、慣性の法則と同様に、この現象界での人生航路の一生が意識に記憶され、この世を去る時の状態での世に帰り、しばらくは現世の意識を持続しているからだ。

その行為と想念の、自分の心に反した意識の中は神仏の光がないために暗く、自分

の心に忠実に生活して正法を実践し、人々を慈悲と愛によって救ってきた人間の意識は光に満ちている。人間がこの現象界で生活してきた一切の善惡については、自分自身で裁き、地獄極楽も自分で定め、罪の償いもまた自分自身でしなくてはならないのが、あの世の掟なのである。

悟るも悟らぬも、己の心次第である。それには何人も干渉することは許されない。自分自身を安易にすることも、きびしくすることも自らの力ではできない世界なのである。

